

文章におけるスピーチレベルシフトの使用実態の分析

イ・ソン

要旨

日本語母語話者の談話・文章において「スピーチレベルシフト」がどういう場面で起こるかを規定するには限界があるかもしれない。それは同じ母語話者であっても言語使用には個人差があるためだと考えられる。本稿ではアンケートのデータとエッセイ集のデータを分析した結果、相手との関わりがある場面(相手に働きかける)では「スピーチレベルシフト」が起こりやすいということがわかった。

キーワード：スピーチレベルシフト、ダ体、デスマス体、メール文、エッセイ

1. はじめに

私は日本語学習者として「談話・文章」での日本語の使用においては授業で学んだ通り「丁寧体」か「普通体」を選択し、それを一貫して使っている。目上の人には丁寧な言葉を使い、同年輩の人には普通体を使っている。また、年齢に大きな差がなくても初めて会った人には丁寧な言葉を使って、時間が経つにつれて心理的距離が縮まると普通体を使っている。しかし、日本のドラマ及び日本人とのやりとりなどを通じて、いわゆる「スピーチレベルシフト」という現象が起こっていることに気付いた。その中でも本稿では「普通体」が基本文体となっている文の中の「丁寧体」へのシフトについて考察する。

詳しくは後述するが、研究方法はアンケート調査とエッセイ分析の二つである。どういう場面でスピーチレベルシフト現象が起こるか、はっきり証明するのは難しいと思う。また、起るとしてもそれがいつも起こるとは限らない。したがって本稿の目的は「スピーチレベルシフトが起こりやすいと考えられる場面」を考えることである。

まず、本論に入る前に筆者が実際に日本人からもらったメールの一部を挙げて基本文体が「ダ体」の文章の「デスマス体」へのシフトが起こりやすいと考えられる場面について考えてみよう。

場合1) 根拠のある事実を伝えるときにデスマス体への変化が起こる。

日本の大学は 4月から始まって、7月下旬に前期のテストがあるよ

それで9月下旬にまた学校が始まりまーす

で、1月下旬に後期のテストが始まるの(もうすぐ!)

テストが終わったら4月まで休みです

なんと日本の大学生は約4ヶ月も休みがあるの

韓国の大学生活についても知りたいな～

場合2) 自分のかっこ悪いところを書くときにデスマス体への変化が起こる。

韓国語は初心者の中の初心者です

そうだよ～韓国語の学習書を買って独学してるよ！

でも残念なことに勉強が進んでおりません・・・

韓国語は何となく読めるようになったけど、書くのが本当に難しい

場合3) 共感を覚えることのできる情報を伝えるときにデスマス体への変化が起こる。

練馬区だと'ラーメン花月'かなあ～

多分チェーン店なんだけど、私行ったことが無いから行きたいの（笑）

ちなみに、吉祥寺（杉並区）には美味しいラーメン屋さんが多いて聞きます

場合1～3は書き手が一方的に読み手に情報を伝える場面である。つまり、相手には何の負担もかからない場合である。続いての場合4と5は相手に負担をかけていてそれに対しての相手からの反応が期待できる。

場合4) 謝るとき、丁寧度を上げるためにていねい体を用いる。

かなりお返事遅くなってごめんなさい

昨日でやっと試験が終わったよー

春休み到来！

韓国はHappy new yearだね

場合5) 相手に要請する時にデスマス体への変化が起こる。

ぜひぜひ私と遊んでくださいな

私としては1月以降だとありがたいです！

だいたい日程は合わせられるはずだから、ソンちゃんの都合に合わせるよ

以下述べていくことは以上のような考察の延長である。集めたデータを「（情報）伝達」の場面（場合1～3）と「働きかけ」の場面（場合4,5）に従って分析を行う。

2. 研究方法

アンケート調査はN大学の学生を対象にした。5つの質問文を作り、学生たちにメール文を書いてもらうアンケート調査を行った。各質問文は先述した5つの場合のようなメール文を書いてもらえるように作られている。質問文は以下の通りである。

＜質問＞あなたにはタメロで話す外国人の友達がいます（実際にはいない場合はいると想定してください）。以下の場面に従って外国人の友達へのメールを書いてください。（分量は自由ですが、最低10文ぐらい書いてください。）

1. 外国人の友達との約束を決めようとしています。できれば6月以降にしたいという希望を含めてメールを書いてください。
2. 外国人の友達にバイト先での失敗談について書いてください。
3. 外国人の友達への返信が遅れてしまいました。事情などを含めて返信を書いてください。
4. 外国人の友達に日本の大学の卒業式について教えるメールを書いてください。

5. 外国人の友達に東京の美味しいもんじゃ焼きのお店を紹介してください。

タメロで話す外国人という設定を示して、基本文体を「ダ体」とするようにした。また、相手を「外国人」に想定して何かを伝えるときには少し「わかりやすく」説明するという効果としてのスピーチレベルシフトを期待していた。全体的には場面に応じたスピーチレベルシフトが起こることを期待した。

3. アンケート調査

3.1 総合的分析

まず、総合的統計を見ると、被験者55人のうち外国人の友達がいると答えた被験者が27名、1人あたり5問のアンケートで回答が書いてあったのが265問である。普通体①は普通体を一貫して使っている場合を、普通体②は普通体がベースとなっていてその中に丁寧体が現れている場合である。

被験者数	外国人の友達がいる	回答あり	丁寧体	普通体①	普通体②
55名	27名	265	18	216	31

既に指示文でタメロ同士の外国人の友達へのメール文だと示しているので普通体を使っている回答文が圧倒的に多かった。問1から問5まで普通体①か普通体②を使った被験者は丁寧体だけを使った回答文を作っていない。逆に丁寧体を使っている人は一貫して丁寧体だけを使う。各質問に1行だけの文を作った人に関しては丁寧体1行の文を作った回答があっても、それをもっと長い文にするとしたら普通体②のような文になる可能性が高い。

次いで文体の選択と外国人の友達の有無の関係性について考えたい。

外国人の友達がいなくて答えた場合（55人のうち28名）			
	丁寧体	普通体①	普通体②
問1	3	17	8
問2	1	22	2
問3	3	19	6
問4	3	20	1
問5	1	23	1

アンケート調査は外国人の友達へのメール文だという前提と、実際に外国人の友達がいるかいないかという質問を通して、「スピーチレベルシフト」と「外国人の相手」との関係性について考えようとした。しかし、アンケート調査の結果、外国人の友達がいると回答したグループといないと回答したグループの間には顕著な差が見られなかった。したがって、相手が外国人であるか否かということは「スピーチレベルシフト」への影響は微々であることがわかる。しかし、問1と問3は「丁寧体」が出やすく、

「丁寧体」と「普通体」の混用が出やすいと考えられる。

1つの文体を一貫に使って答えた場合			
	丁寧体	普通体①	普通体②
外国人の友達がいる	1	15	0
外国人の友達がいらない	1	10	0

また、問1～問5を1つの文体を一貫にして使った回答のデータをみると、このアンケート調査では丁寧体の使用と外国人の友達の有無との関係性を分析するのは難しい。普通体②の使用に関しては丁寧体と普通体の混用が特殊なものであることがわかる。

3.2 設問別分析

これからは設問別に普通体②の使用についての分析を行いたいと思う。まず、普通体②の使用の回答が多かった問1と問3について考えよう。

場合5の「相手に要請する時」のスピーチレベルシフトを期待していた問1は期待していた通りのシフトが現れていた。「6月以降にしたいです」「僕は6月意向を希望しています」などのような文型が多く、もうちょっと丁寧度が高かった回答としては「6月以降にしてもらいたいです」があった。逆に「〇〇はお暇な日ありますか？」のように相手の都合を聞く場合の普通体②の使用もあった。

外国人の友達がいると答えた場合（55人のうち27名）			
	丁寧体	普通体①	普通体②
問1	1	22	4
問2	1	25	1
問3	2	19	6
問4	2	24	1
問5	1	25	1

場合4の「謝るとき」のスピーチレベルシフトでは謝るときの丁寧さを上げるために「ごめんなさい」「すみませんでした」などを期待していた。確かに「ごめんなさい」から回答文を書いている回答文があった。それ以上の成果があったと思ったのは「事情の説明」の部分にあった。「すまん」「ごめん」などの謝り方をしている、返信が遅れてしまった理由を説明している部分は「デスマス体」を用いている回答があった。例えば「～してて気づきませんでした」「お風呂入ってました」などがある。

最後に、普通体②の使用が少なかった問2、4、5について考えよう。

問2は場合2の自分がかっこ悪かったと思うところを書くときの「デスマス体」使用を期待していた質問である。しかし、ほとんどの被験者が普通体①を使っていて、「デスマス体」が使われていたとしてもただの状況の説明であった。

問4は普通体②の回答が二つしかなかったものの、場合1の「根拠のある事実を伝えるとき」の「デスマス体」へのシフトが起こる可能性があると考えられる回答を受

けることができた。例えば「もうすぐ日本では卒業シーズンなんですよ」「大学の卒業式は～厳かな式典です」があった。しいていえば、卒業シーズンというのは毎年行われる行事であり、日本の大学の卒業式に行けばどういう雰囲気のものかが分かる、というわけでそれが証明できると考えられる。とても少なかった回答ではあったが、こういう場合でのスピーチレベルシフトが考えられると思う。

問5は「共感を覚えることのできる情報を伝えるとき」の「デスマス体」使用に関しての質問であった。やはりこの質問でも普通体②の使用が少なかった。期待していた通りに書いてもらうことができた回答は「もんじゃ焼きはどのお店もおいしいです」という回答である。しかし、これは日本人なら誰でもそう思って共感ができるものなのか、それともただ個人の感想であるのかわかりにくい。もう少し普通体②の使用が出やすい質問にしたらこれよりサンプルが集められたかもしれない。

アンケート調査分析を通じてメール文では「情報を伝える場合」といった問2,4,5より「相手に働きかける場合」といった問1,3で「スピーチレベルシフト」が最も多かった。それはメールというのは新聞記事などのように不特定多数に読まれるものではなく、特定した人とやりとりをする媒体であるためである。というわけで、負担をかけるような「相手に働きかける」といった場面ではやはり起こりやすいと考えられる。

それでは、エッセイの場合はどうか考えてみよう。エッセイは専門的知識といったものを伝える媒体ではないが、読み手を特定していない、そしてある程度の情報を伝えるということからアンケート調査の結果と比較してよいと考える。

3.3 エッセイ

本稿で扱うエッセイ集は毎年出版される文芸春秋社のエッセイ集（日本エッセイストクラブ編）である。エッセイでは個人的な情報を含めて不特定多数にある情報を伝える。アンケート調査に比べると相手に情報を提供する場面でのスピーチレベルシフトが起こると考えられる。7冊のエッセイ集の中から前述した場合2,4,5に当てはまる例文を挙げたい。

3.3.1 補足説明の場合

まずは補足説明の場合である。読み手を特定してはいないが、「丁寧体」を用いた瞬間だけは筆者が顔を出して読み手に直接声をかけているような効果がある。この場合、情報伝達に筆者の感情も乗せていると考えられる。特に例文（2）は「念のため」という言葉を前に置いているので、情報を伝えようとする筆者の意図が明らかになる。

- (1) オフィスの一室に入れば、白いYシャツにネクタイ姿の佐野周二さん（関口宏さんの父君ですね）が此方^{こちら}を振り返って、「やあ、如何だい？ 君」。

（「銀座行、駅馬車に乗って」『人生の落第坊主』p.148～149）

- (2) 作者「それって、マリファナの吸い方のことなんだけど、え、あなたマリファナ吸ったことないの？ そうなの、日本は禁止されているのね？ じゃ、日本の読者にわかりやすい表現に変えてくれていいわよ」（訳者注・念の

ために書いておきますが、ドイツでもマリファナは禁止です)
(「卵を抱きながら。もしくは、くせになる翻訳」『ネクタイと江戸前』p.288)

3.3.2 対比する場合

(3) 其等の場所を皆、銀座と呼ぶのは乱暴の様だが、当時広島県の尾道と謂う港町の、丸で露地の様にごちゃごちゃと小さな商店が立ち並ぶ金座街の活動小屋で、斯うした画面に胸をときめかせて居た小学生のぼくにとっては、東京も丸の内も、何でも銀座だった。金より銀の方が上の筈だが、銀座こそは憧れの夢であり、我が郷里の商店街の中の金座は、直ぐに剥がれるメッキの夢でありました。(「銀座行、駅馬車に乗って」『人生の落第坊主』pp.148-149)

個人的な情報を伝える場面である。「銀座」と「金座」が自分にとってどういう存在であったか、個人的な感想・情報・を伝えている。この文では「銀座」と「金座」を対比しているので、各々に対しての評価がはっきりにわかってくる。これによって筆者の心情をより明確に伝えることができる。

3.3.3 自分の感情を強調する場合

(4) 超難解文学者の埴谷雄高先生が、絶妙な座談の人であった、というのを、先生がなくなった後、周囲の人にインタビューして回った本『奇抜の人』（平凡社）で知ったのだが、その中で私がもっとも気に入っているエピソードを、ここで引用したい。証言しているのは、写真家の武田花さん。(引用文省略)ウサギ……っていう、大きさと、もしそれが入れてあげればできるはずの複雑な陰影と立体感が、絶妙です。私は、この冗談だけで、埴谷先生が天才である、と納得しました。(「シャラボワの活用」『カマキリの雪予想』p.199)

例文(4)も同じく、筆者の個人的な感想を伝える文章である。この文章ではある対象についての個人的な感想に続いてエピソードを引用し、それに対して自分の感想を述べている。筆者自身の個人的な記憶・感想についてのものなので読者にも同じくそれを感じさせるよりはただ感じたことについて述べているような感じがする。

4. まとめ

メール文といった日常生活の中での文章では相手に働きかける場合に「スピーチレベルシフト」が起こりやすい。読み手が特定されていて、直接「感謝・謝罪する」場面、「頼む」場面では相手からの反応が期待される。また、「頼む」といった場面では書き手の希望を伝えているので相手に負担をかけてしまうことを緩める効果があると考えられる。

それとは逆に、エッセイの場合は普段、読み手が不特定多数であるので相手に気を使う必要はない。ただ一方的に情報を伝えるのでそういった場面で「スピーチレベルシフト」が起こりやすいことがわかった。